

富岡洋子作 「さよならの季節 - 見えない明日に向かって」

< 前編 >

(音楽) (卒業式リハーサルの「揚げば尊し」)

野原涼子 (しゃくり上げて泣いている)

瀬戸真弓 (小声で) ちょ、ちょっと涼子、何泣いてんのよ。どうしたっていうの？

涼子 だって、だってこの歌 歌ってると、悲しくなっちゃって。

近藤 バカ。練習の時になくやつあつかよ。

真弓 ほーんと。近藤君の言う通り。涼子、少しセンチになりすぎなんじゃん？

涼子 あら、真弓は平気なの？

真弓 別に。

涼子 どうして？ 卒業しちゃうのよ。みんな離れ離れになっちゃうのよ！

近藤 いいじゃん。せいせいするぜ。

加藤先生 こらあ、そこ！ 練習中に何くっちゃべってんだあ！

涼子・真弓 (口々に) はーい、スママセーン。

近藤 これだもんな。あの加藤のやつとも早くおさらばしたいもんだぜ。

涼子ナレーション わたし、野原涼子。青春中学3年生。やっと高校が決まったと思ったら、もう卒業。なんだか中3の3学期って、慌ただしくて、ちっとも落ち着いて勉強できないのよね、なーんちゃって。とにかく、心が揺れてるのよね。なんか物悲しいのよねえ。やっぱ、別れが近づいてくるからかなあ。あー、悲しいなあ。

加藤先生 はい、よーし。ま、人に聞かせられるくらいの歌にはなったね。

生徒 (口々に) 「えー！」「ブー！」「ひでえな」

加藤先生 何言ってるんだ。お前たちの晴れの舞台なんだからな。最後はピシッと決めてくれよ。

生徒 はーい。

加藤先生 あー、中学生生活もあとわずかだが、最後まで気を引き締めて、中学生らしい行動をとるように。高校が決まったからといって、フラフラ遊んでるんじゃないぞ。その気の緩みが、高校生活に悪い影響を及ぼすんだ。今までは、同じ小学校から上がってきた人間がほとんどだったが、高校は違う。いろんなところからの寄せ集めだ。ぬるま湯につかってるつもりじゃ、落ちこぼれるからな。分かってるな？(FO)

涼子モノローグ ゲー。なんだか卒業の感傷に浸ってる場合じゃなくなっちゃったよ。そうだよな。高校はぬるま湯じゃないよなあ。

(効果音) (ドアの開く音)

涼子 ただいま。

母 あ、涼子ちゃん、お帰り。今日ね、桜高校から手紙が来てたわよ。

涼子 桜高校から手紙？

母 ほら、これ。「制服のお知らせ」って書いてあったけど。

涼子 ふうん。

母 寸法測りに、四越デパートに行かなくちゃね。いつがいいかしら。まあ、でも桜高校の制服ってかわいらしいじゃない。白のボレロとリボンが女の子らしくて。ねえ、涼子ちゃん。あら、どうしたの？

涼子 別に。わたし、着替えてくる。

母 あら、見ないの、手紙？ 涼子ちゃん！（ため息）まだ気にしてるのかしら、青春高校に落ちたこと。

(音楽) (レコード「卒業写真」YU・MIN)

涼子モノローグ あーあ、どうして分かってないんだろ。そりゃ、桜高校には受かったけどさ。第1志望としては、やっぱり青春高校だったんだよね、わたし。だって、高梨君が受けるって真弓から聞いてたから、わたしも、ちょっと無理かなとも思ったけど、同じところ行きたかったから…。そうすれば友達になれるチャンスがあるかと思って挑戦したのに…。高梨君、一度も同じクラスになれなくて、いつも遠くから見ているだけだった。

(効果音) (クラスのガヤ)

真弓 ねえ ねえ涼子。今日のホームルーム、音楽室でやるんだって。

涼子 ふうん。どうして教室でやらないんだろ。

(効果音) (始業のチャイム)

真弓 あ、急がなくちゃ。行こ。

涼子 わあ、遅れるう。待って、真弓。

加藤先生 こら、だれだ、廊下走るやつは！

涼子・真弓 はい、すみません。

涼子 ケケ。また加藤に怒られちゃったね。

真弓 気にしない 気にしない。あ、矢沢先生が来た。

矢沢先生 こら こら。遅いぞ、お二人さん。

涼子・真弓 はーい、お先にい。

ナレーション この先生が、わたしたちのクラス担任の矢沢先生。まだ二十代の若い先生なの。口は悪いんだけど、でもよくわたしたちの話を聞いてくれて、とても頼りになる先生。先生の話だと、先生はクリスチャンなんだって。ちょっとイメージ違うけど。(笑い)

(効果音) (教室のドアの開く音)

小倉哲男 起立。礼、着席。

矢沢先生 ありがとう、小倉君。君に号令をかけてもらえるのも、あと1週間ね。ほんと、あ

りがとね。

小倉 はい。いえ...、はい。

矢沢先生 えー、今日みんなに音楽室に集ってもらった訳は、みんなでね、歌を歌いたいな、と思ってね。

生徒 (口々に)「えー！」「歌？」「だせーよ」

(音楽) (矢沢先生、ピアノで「揚げば尊し」を弾き始める)

生徒 なんだ、「揚げば尊し」じゃん。つまんないよ。

矢沢先生 そう、これじゃなくて...。

(音楽) (矢沢先生、「贈る言葉」を弾き始める)

生徒 「あ、知ってる、この歌」「“贈る言葉”だよな」(ピアノと一緒に口ずさむ)

矢沢先生 先生も好きよ、この歌。「愛するあなたへ、贈る言葉」。お別れに何か贈りたいって気持ち、分かるな。そこで先生から一つ、ちょっとこれ、さっきの遅れたお二人さん、配ってくれるかな。

涼子・真弓 はーい。

近藤 なんだ、これ、楽譜じゃんか。

矢沢先生 そう、楽譜。この歌ね、先生の大学、立教大学だったんだけど、その卒業式では必ず歌った歌なの。だれかに読んでもらおうかな。あ、じゃ、瀬戸さん、読んでくれる？

(音楽) (BGM讃美歌「神 共にいまして」)

真弓 (読む)「神、共にいまして、行く道を守り、あめのみ糧もて、力を与えませ。また会う日まで、また会う日まで、神の守り、なが身を離れざれ。」

生徒 「難しいなあ」「神様の歌？」

矢沢 そう、神様の歌。賛美歌なの、この曲。「神様が、いつでも、どんな時でも、あなたと一緒にいて守ってくださるように。また会うその日まで。」そんな意味の歌なの。

生徒 「関係ないよ、神様なんて」「分かんない」

矢沢先生 そう？ わたしは君たちを、卒業してからもずっと見ていたいって気持ちがとても強い。でもそれはムリね。だけど、人間じゃなくて、全能の神様なら不可能じゃない。君たちが思い出さえすれば、神様はすぐそばに来てくださるの。わたしはその神様に君たちの未来をゆだねることをしようと思ってる。

ナレーション こう言い切った矢沢先生の横顔は、確信に満ちていた。わたしはなんだか、先生の言う神様に優しさと親しみを感じた。

(効果音) (終業のチャイム。ガヤ)

真弓 ちょっと先生のとこ寄ってくよ。

涼子 いいよ。わたしも行く。

真弓 先生。矢沢先生。

矢沢先生 あら、なあに？

真弓 あの、お別れ会のことなんですけど、ちょっといいですか？

矢沢先生 ああ、瀬戸さんはクラス委員だから、最後まで大変ね。わたしも最後のお別れ会になるな。

涼子 え？ 先生、それどういうことですか？

真弓 「最後」って、先生、辞めるんですか？

矢沢先生 うん。6月に結婚することになってね。だから…。

涼子 どうして？ 結婚しても続ければいいのに。

矢沢先生 もちろん考えたわ。でもね、考えても 考えても、「わたしには両立は無理だな」と思ったの。家事も仕事も一生懸命やりたい。でも結局はどちらも中途半端になりそうだから。君たちを見送ると同時にね。

真弓 そうなんですか。先生、いつもわたしたちのために一生懸命やってくれてたから、仕事辞めるの寂しいんでしょうね。

矢沢先生 うん。そんな涙出るようなこと言わないで。決心したんだから。“さよならの季節”ね、どこもみんな。

真弓 さよならの季節？

真弓 寂しいな、先生いなくなっちゃうなんて…。

ナレーション 一人っ子の真弓は、矢沢先生を姉のように慕っていたから、かなりがっかりしていた。

(効果音) (玄関の開く音)

涼子 ただいま。

母 お帰りなさい。遅かったじゃない。さっきから哲ちゃんが待ってたのよ。

涼子 哲ちゃんが？ なんで？

哲男 あ、涼子ちゃん、お帰り。

ナレーション この哲ちゃんこと、小倉哲男君は、同じクラスのあの号令係。実は哲ちゃんとは家が隣同士の幼なじみなの。ちょっとトロいんだけど、優しい、いい男の子なんだ。

涼子 で、何？ どうしたの？

哲男 うん。今日さ、体育の時間の着替える時にさ、僕さ、…

涼子 なんなんだよ。早く言ってよ。

哲男 うん。だからさ、聞いたんだよ。

涼子 何を？

哲男 “お礼参り”するんだって。

涼子 えー。いつ、だれが？

哲男 だから、今日、近藤君たちが。

涼子 なんだって!? 今日、あのワルたちが？

哲男 だからさ、先生に知らせようかどうしようか、涼子ちゃんに相談しようと思って。  
涼子 (かぶせて)大変だ、こりゃ。えーと電話、電話。学校の番号はと…。6、1、9…  
(効果音) (ダイヤル、呼び出し音)  
矢沢先生 (フィルター音)はい、青春中学です。  
涼子 あ、先生？ 大変なの。  
矢沢先生 (フィルター音)あら、野原さん。ん？ なあに？ あ！  
加藤先生 (フィルター音)なんだ、お前らは！  
(効果音) (教員室の教具が倒れ、壊れる音)  
女性教師たち (フィルター音)キャー！  
涼子 先生、先生！ どうしたんですか？ 先生！

< 後編 >

(音楽) (「揚げば尊し」)  
涼子ナレーション わたし、野原涼子。青春中学3年生。いよいよ、いよいよ卒業が目の前に迫ってきて、何かしら心が揺れる毎日です。というのも、ひそかに思いを寄せていた高梨君と同じ高校を受験したけど、見事失敗。とうとう一言も交わすことなく、別れることになるんだろうなあ。もう一つ。寂しいことに、信頼していた担任の矢沢先生も、結婚のために退職しちゃうっていうし…。  
そうそう、大変なことが今起こってるの。幼なじみの哲ちゃんこと、小倉哲男君が教えてくれたんだけど、3年の近藤君を始めワルたちが、先生方に“お礼参り”だって言って、大変なの！  
(効果音) (教員室内で暴れ回り、教具が倒れ、壊れる音)  
加藤先生 なんだ、お前らは！  
近藤 うるせえ！ “お礼参り”に来てやったんだ。  
加藤先生 なんだと?! 近藤、なんのつもりだ？  
近藤 よくも今までおれたちハンパもんをコケにしてくれたな。  
男子 その“お礼”だよ。そりゃー！  
(効果音) (窓ガラスの割れる音)  
教師たち (口々に)「キャー！」「やめろ！」「何するんだ！」  
矢沢先生 やめなさい。君たち、やめなさい。  
男子 るっせー、引っ込んでろ！(矢沢先生を激しく押す)  
矢沢先生 あ、いた…。  
女性教師 なんてことを！ さ、加藤先生、電話を。警察に電話を！  
加藤先生 あ、ああ、でも…。  
女性教師 早くしないと、わたしたちまで！  
加藤先生 そ、そうですね。じゃ。(受話器を取り上げる)

近藤 そうやって、なんでも権力で押しつぶそうとするんだよ、お前ら！  
(効果音) (器材を壊す音)

矢沢先生 そうです、やめてください、先生。  
(効果音) (受話器を取り上げ、戻す音)

加藤先生ほか (口々に) 矢沢先生！

矢沢先生 そんな方法、いけませんわ。なんの解決にもなりませんよ。

加藤先生 あ、しかしね、実力行使でこちらも…。

近藤 (かぶせて) ゴタゴタ言ってるんじゃないよ！ マッポ呼ぶなら呼んでみる。明日の新聞に載っかるぜ。「青春中、初めての不祥事」ってか。(笑う)

(効果音) (矢沢先生が近藤のほおを「ピシャッ」とたたく音)

近藤 いてえ。何すんだよ。

矢沢先生 それで傷つくのはだれなんだよ。君たちだろ？ 先生たちは少し時間がたてば世間も忘れてくれる。でも君たちには、一生その傷が付いて回るんだよ。

男子 い、一生…。

矢沢先生 そんな人生にさせたくないだろうが、だれだって。なめんじゃないよ、先生ってもんを！ だれのために苦しんだり、悲しんだりしてるとってんの？ 君たちがそれぞれに一番よい道を選べるようになっていう一心だろうが！

近藤 …(たじろぐ)

矢沢先生 はい、今日の練習はこれまでね。特別今日だけ、後始末は免除してやっから。さ、一緒に帰ろ。ね、帰ろ。じゃ、失礼します。あと、よろしく。

加藤先生ほか 「あ、矢沢先生。」「先生…。」

ナレーション こんなことになってるとも知らず、わたしたちは必至に学校に向かって走っていた。

涼子 (激しい息遣い) 急がなくちゃ。大変、大変。早く、早く。ちょっと哲ちゃん、もっと早く走ってよ。先生が大変なんだから。

哲男 分かってるけど、まってよ、涼子ちゃん。早いなあ。あれ？ 矢沢先生だ。

涼子 ほんと。先生！ 矢沢先生！

矢沢先生 あら、君たち。どうしたの？ 夜のジョギング？

涼子 大丈夫だったんですか？ 近藤君たちは？

矢沢先生 あら、知ってたの？

涼子 はい、哲ちゃん… じゃ内、小倉君が教えてくれて、それで学校に電話をしたんです。そしたら、すごかったから、もうビックリしちゃって。

矢沢先生 ありがと。でももう済んだの。何もなかったことにして。彼らのために。ね？ 野原さん、小倉君。

哲男 はい、そうすね。

涼子 え、でも…。

矢沢先生 近藤君たちね、言ってたよ。「高校へ行ったら、今までの自分を知らない人たちの仲で、もう一度やり直したい」って。わたしたち教師の偏見が彼らにあんなことさせちゃったんだよねえ。あ、そうだ、小倉君も学校決める時に、そう話してたね。

哲男 はい。僕はのろまだから、今までもずいぶん意地悪とかバカにされてきたけど、でも先生は僕を“つまらない人間じゃない”って認めてくれたから。“自信持って生きなくちゃ”って教えてくれたから。

涼子モノローグ わたしも哲ちゃんのこと見下してた。心のどこかでバカにしてたっけ…。

哲男 だから、だれも今までの僕のこと知らない人たちの学校へ行って、たくさん勉強とか、運動とか、してみたいと思ってるんだ。

涼子 哲ちゃん、すごいよ。偉くなったね。あ、ごめん。ヘンな意味じゃないよ。これ、本気。

哲男 えへ。涼子ちゃんに言われると、照れるけど。(3人、笑い)

(効果音) (教室のガヤ)

ナレーション 翌日、何もなかったように、学校は動いていた。

涼子 おはよう、真弓。

真弓 (元氣なく)うん。

涼子 今日は気分いいんだ。ああ、でもあと5日しか、この机に座らないのよねえ。

(効果音) (机をたたいてみる)

涼子 そう思うと、やっぱり寂しいなあ。ねえ、真弓。真弓ってば。

真弓 うるさいなあ。

涼子 え？ どうしたの？

真弓 寂しいとか、悲しいとか言ってるくせに、よくそんな明るい顔してるわね。

涼子 だって、そりゃあ卒業でみんなと離れ離れになってしまうのはとてもつらいけど、ほんとにもうみんなバラバラになるから悲しいけど、でも、“会うは別れの始まり”っていうし、また高校へ行っているんな出会いもあるわけだから、それに期待してさ。

真弓 期待？ そうね、涼子は桜高校だからね。

涼子 え、どういう意味？

真弓 わたしは、受験校で有名な高嶺<sup>たかね</sup>高校。どんなエリートたちが集まるのかと思うと…。

涼子 ちょっと真弓。そういう言い方ってないんじゃない？ それじゃまるで、わたしの行く高校はバカの集まりってわけ？ どうせわたしは青春高校に落ちこちて、桜高校へ行く身ですよ。でもね、バカだってそれなりの明日ってもんがあるんだから！

真弓 わたしには、わたしには、明日なんか見えないわよ！



(効果音) (イスを「ガタン」と引いて走り去る)

涼子 真弓！ もう勝手にしてよ。

ナレーション いつもと違う真弓の態度に、わたしは憤りと同時に戸惑いを感じた。でも、真弓の心に何があったのかを、理解しようと努めるほど、わたしは冷静にはなれなかった。

(効果音) (乱暴に玄関を開ける音)

涼子 ただいま！

母 あら、すごい剣幕ね。お帰り。何かあったの？

涼子 もう、あったまきちゃったア。真弓ったらさ、ひどいこと言うんだよ。

母 あら、あの物静かな真弓ちゃんが？

涼子 思えないでしょ？ わたしも…。

(効果音) (電話のベルが鳴る)

涼子 あ、わたし出る。

(効果音) (受話器を取り上げる)

涼子 はい、野原です。あ、真弓のおばさん。こんにちは。はい。え、真弓ですか？  
いいえ、来てませんけど。はい、はい、(真剣に)はい、はい。じゃ、わたしもちょっと探してみます。はい、また連絡します。じゃ。

(効果音) (受話器を置く音)

母 どうしたの？ 真弓ちゃん、帰ってないの？

涼子 うん。なんかヘンなんだって。部屋もきちんと片付いてて、気味が悪いくらいって。そう言えば、今日、様子がおかしかったし…。わたし、行ってくる。

母 気をつけてね。暗いから。

(効果音) (玄関を閉める音)

(音楽) (「旅立つ秋」YU・MIN)

涼子モノローグ どうしたんだろ。真弓、ヘンな気 起こさないでよ！

(効果音) (街の雑踏)

涼子モノローグ あー、いないな、真弓。どこ行ってんだろ。

(効果音) (遠くから自転車のベルが「チリチリ」鳴る音)

近藤 おーい、野原 ！

涼子 あら、近藤君。どうしたの、こんなところで？

近藤 (オフから)お前探してたんだよ。矢沢先生に頼まれて。連れてきてくれて、

涼子 なんで？

近藤 瀬戸が、瀬戸が自殺したんだ。川ん中に身を…。

涼子 (かぶせて)ウソー！ そんな、信じらんない。真弓が自殺なんて、そんなこと！

ナレーション 頭ん中が真っ白になってく気がした。真弓が、真弓が自殺だなんて…。どこを



どう走ってきたのか。近藤君の自転車に乗せてもらって、真弓のいる病院に着いた。

- 矢沢先生      あ、野原さん。来てくれたのね。
- 涼子            先生！ 真弓が死んじゃったって、ほんとなんですか？ わたし、わたし...(泣く)
- 矢沢先生      死んでなんかいないわよ。ちょっと水を飲みすぎてて、まだ面会できないんだけど。
- 涼子            えー！ だって近藤君が“自殺”って。もう、近藤君たらぁ！
- 近藤            お前が最後まで聞かなかったんじゃないかよ。
- (効果音)      (病室のドアを開ける音)
- 矢沢先生      しっ！ (中)入ってもよろしいんですか？ あ、はい。じゃ。
- (効果音)      (病室のドアを閉める音)
- 涼子            真弓！
- ナレーション      病室に入ると、目の前に、弱々しく呼吸をしている真弓がいた。“生きてる！” そう思った。でもその姿は、とても痛々しかった。
- 涼子            真弓、どうして？ どうして、こんなこと！
- 真弓            (ゆっくり弱々しく)見えなくなっちゃったの、明日。なくなっちゃったの。
- 近藤            お、おれなんかさ、ガキのころから虫けら扱いでさ、明日なんて考えなかったけどさ、だけど自分からなくしちゃったらさ。なあ、先生。
- 矢沢先生      わたし、瀬戸さんのためにお祈りするわ。「わたしたちをつくられた神様。わたしたちに命を与え、生きるようにして下さった神様。...」(F0)
- ナレーション      ビックリした。でも思わず、一緒にいた近藤君も、わたしも、手を組んで頭をうなだれていた。先生の祈りに合わせて。
- 矢沢先生      (祈り)わたしたちには、だれも未来のことは分かりません。そのために、心が大きな不安に包まれてしまうことがあります。神様はすべてのことをご存じで、すべてのことを、わたしたちに一倍よいようにして下さるお方です。どうぞ、今、“不安”という大きな波の中に沈みそうなわたしたちを守ってください。波がどんなに荒れても、海の底はいつも平安であるように、わたしたちの心にも、いつも神様が共にいてくださいますように。救い主、イエス・キリストの名によってお祈りします。アーメン。
- ナレーション      いつの間にか、先生の祈りに、わたしは本気になって心を合わせていた。目を上げると、近藤君の肩が気のせいかわらぬように震えていた。そして、そして真弓の目からも涙が落ちて光ってた。
- (音楽)          (「注がれた愛」ニューライフ)
- ナレーション      今、“さよならの季節”。みんな別れ別れになって、自分の道を踏み出していく。“見えない明日”って、怖くない？ 寂しくない？ でも、“神様が一緒にいてくだ

さる。”矢沢先生の祈りを聞いて、わたし、どうしてか分かんないけど、それだけは信じられた。だから真弓、近藤君、哲ちゃん、そしてみんな、思い切って一歩踏み出そうよ。見えない明日に向かって！

< 完 >